

[別紙 2]

審 査 の 結 果 の 要 旨

氏 名 新 正 由 紀 子

本研究は、中等度の難聴を有する小児の言語発達への補聴効果を明らかにするため、中等度難聴児の言語発達に影響する種々の要因について検討をおこなったものであり、下記の結果を得ている。

1. 新生児聴覚スクリーニングを経て東京大学附属病院耳鼻咽喉科外来を受診した過去6年間の小児症例69例の調査を行った。スクリーニング経由例数は年々増加傾向にあった一方で、スクリーニングを経ない例の数は横ばいであった。スクリーニング経由症例の四割が中等度難聴であった。スクリーニング経由例は平均生後7カ月前後で補聴及び療育を開始するという順調な経過をたどっていたが、スクリーニングを経ないで紹介される例は補聴開始が平均1歳11ヵ月と遅かった。新生児聴覚スクリーニングの浸透によって中等度難聴児でも生後早期に発見される症例が今後増加すると予想された。
2. 軽度および中等度難聴児症例64例に対して、Wechsler法知能検査を用いて言語発達を評価した。言語性IQ(VIQ)に影響を与える因子として、動作性IQ(PIQ)、聴覚閾値レベルおよび語音弁別能に関しては、感音性難聴群、伝音性難聴群いずれにおいても、有意な相関を認めなかった。VIQと補聴期間に関しては、感音性難聴群、伝音性難聴群のいずれも、有意な正の相関を認め、2群とも、補聴なしあるいは補聴期間が4年未満の群ではPIQに比べVIQが有意に低値であったが、補聴4年以上の長期群ではVIQとPIQとに有意差を見出し得なかった。中等度難聴児でも、補聴がされていないか短期間の場合には言語発達が遅滞するが、

3. 人工内耳(CI)装用小児症例 17 例に対して WPPSI 検査を用いて言語発達を調査した。VIQ と PIQ とに有意差が認められ、VIQ は低値を示し、CI 装用例でも言語発達が遅延することが示唆された。VIQ に影響を与える因子の検討を行い、CI 装用下の語音弁別能との有意な正の相関は見られたものの、PIQ・手術年齢・CI 装用期間との相関は見いだせなかった。中等度難聴児と CI 装用児は補聴閾値が同程度であるが、長期補聴で言語発達が本来の知能に近づく可能性の高い中等度難聴児と比べ、CI 装用児では、長期間の CI 装用でも言語発達の遅滞は残存するおそれがあり、術後はもちろんのこと、就学後も CI 装用児への濃厚な援助および療育が必要であると考えられた。

以上、本論文は、今まで特に関心が寄せられることの少なかった中等度難聴児に焦点を当て、中等度難聴児は一見普通にみえても言語発達遅滞を来し、その対策には補聴器の長期間の装用が有効であることを客観的に明らかにした。本研究は、今後増加が見込まれる、早期発見された中等度難聴児の補聴に重要な貢献をなすと考えられ、学位の授与に値するものと考えられる。